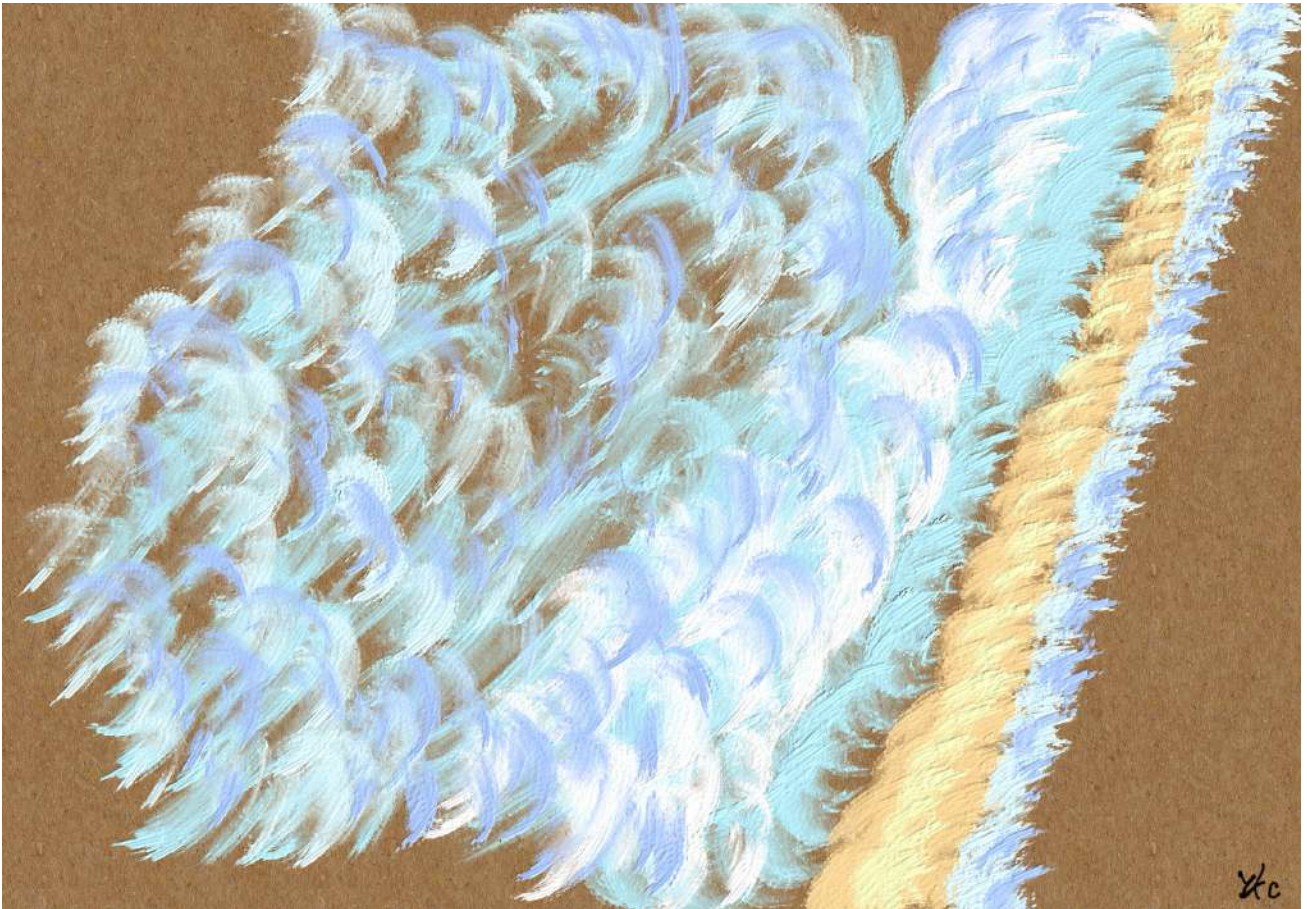

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 298

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



No.838 今日という日の終わりに_In the End of Today

目次

- 5941. アボリジニーアートと原始的エネルギー
- 5942. 対話を通じた真理の発見と自己発見:アボリジニーアートとのつながり
- 5943. 今朝方の夢
- 5944. 肌寒いある夏の日の振り返り:血の通った表現物を共有し続けること
- 5945. 今朝方の夢
- 5946. コミュニケーションの商品化&ある画家の方との出会い&ロイ・バスカーの哲学思想への関心
- 5947. 対象から離れることと本質に近づくこと:現代の教育や人財育成で喪失してしまった発想
- 5948. ロイ・バスカーへの共感・共鳴
- 5949. 今朝方の夢
- 5950. 仮眠中のビジョンと現代人の一側面
- 5951. 発達科学の研究成果の価値判断について:インテグラル理論の果たす一つの役割
- 5952. 今朝方の夢
- 5953. 実践霊性学と実践美学の書籍の出版に向けて
- 5954. 社会科学に潜む別種の「フラットランド化」:「発達は一概に善ではない」という主張に留まることの問題
- 5955. 認識論的・存在論的な意味での変容と解放をもたらす芸術作品
- 5956. 今朝方の夢
- 5957. 「忘れたことと忘れさせられたこと」:社会実践性を希求する実践霊性学・実践美学・成人発達理論・インテグラル理論
- 5958. コロナの蔓延をきっかけに群衆化を強める現代人
- 5959. 「意識」という言葉より:アートの治癒的・変容的・解放的・コミュニケーション的側面の探究
- 5960. ニューヨークを舞台にした今朝方の夢

時刻は午後7時を迎えた。今、フローニンゲン上空の空は雲に覆われていて、夕日を眺めることはできない。だが、今はどこか心が温かい。それは今日という1日が充実していたことの現れだろう。

今日は1日を通して非常に肌寒かった。ここ最近は何部屋で半ズボンで過ごせることも多かったが、今日は長袖長ズボンを着る必要があったほどだ。今も外が寒いのでキッチンと寝室の窓を閉めた。もう少ししたら書斎の窓も閉めようと思う。

今日は午前中に、秋のイベントで一緒させていただくある画家の方とお話をさせていただいた。およそ2週間前に顔合わせのミーティングをさせていただき、今日はインタビューを兼ねたミーティングだった。インタビューの90分が本当にあつという間に過ぎていき、とても充実した時間を過ごさせていただいた。事前にこちらで質問を用意していたのだが、それらを全て取り上げることはできず、むしろ取り上げることができたのは1割ぐらいであり、それは嬉しい事態であった。それだけ1つ1つの話題を深く掘り下げていくことができたという証であり、秋の対談講演会の時に本日取り上げることのできなかつたテーマについて話を聞ける楽しみもある。そのように捉えれば、取り扱うことのできなかつた観点やテーマが多く残っているというのは喜ばしいことである。

今日はこちらからのインタビューの形でミーティングを進めさせていただいたのだが、その方が私のウェブサイトを見てくださり、絵について嬉しいフィードバックをしてくださった。私の絵は、アボリジニーアートのような原始的なエネルギーがあると述べてくださった。アボリジニーアートというものがあることを私は知らず、後ほど調べてみたところ、確かにアボリジニーアートが持っているような色使いや雰囲気と似ており、そこに内包されているエネルギーについても似たようなものがあるかもしれない。この点についてはまた自分で探究をしていこうと思う。

秋の講演会まで4ヶ月弱ほどあるので、今日のインタビュー内容をもう一度自分で整理し、そこからPPT資料を作っていこう。ここ数年間は、自分でPPTを作ってセミナーや講演会を行うことを控えていたので、PPT資料を作るのは久しぶりだ。ひょっとしたら、2018年にアムステルダムで行った学会発表の際に作った資料が最後だったかもしれない。いずれにせよ、PPTの作成も一つの創作活動

であるから、大いにそのプロセスを楽しみたいと思う。秋に向けてまた一つ楽しみが加わったことに感謝をしたい。フローニンゲン:2020/6/29(月)19:30

5942. 対話を通じた真理の発見と自己発見:アボリジニーアートとのつながり

時刻は午前6時半を迎えた。今朝もまた昨日と同じく、空には雲が覆っていて、朝日を拝むことはできない。昨日から再びぐっと冷え込み始め、今日は再び長ズボンを履いて過ごしている。天気予報を見ると、冴えない天気がこれから1週間ほど続き、その期間は軒並みひんやりとした気温になるようだ。

今日は午後、街の中心部の美容室に行くことになっている。先月の中旬によく髪の毛を切ってもらうことができ、そこから早いもので6週間ほど経った。今日もかかりつけの美容師かつ友人のメルヴィンとの会話は盛り上がるだろう。どのような話題がその場で取り上げられるのか、今から楽しみだ。

午後に出かける際も気温が低いため、今日は長袖を来て外出しようと思う。自転車に乗っている人たちはジャケットを羽織っていたりするのだが、歩く場合にはそこまで必要ないだろう。髪を切ってもらったら、その足でコーヒー専門店に立ち寄り、深堀のコーヒー豆を2種類ほど購入しようと思う。

昨夜は少しばかり、午前中に行ったある画家の方とのミーティングについて回想していた。その方とはこの秋に対談講演会をさせていただくことになっていて、当日の対談が今からとても楽しみなのだが、その楽しみの根源にあるものについて考えていた。

昨日のミーティングの際にも感じたのだが、その楽しみの根源には、お互いの相互作用によって生み出される真理の開示とお互いにとっての自己発見があるように思われる。真理も自己も、階層性を内包したものであり、それはコンテキストを含めて、諸々の条件が揃ったときにその瞬間に固有な形として姿を表す。つまり、絶対的な真理や絶対的な自己というものは存在しておらず、それは外部環境を含めた他者との相互作用によって姿を露わにするものであり、とりわけ深い対話が実現されると、これまで見たことのないような次元の真理と自己が顕現するということだ。昨日の対話ではそのようなことを実感しており、その方との対話を通じて、私自身も色々と自己発見があった。当日の対談においてどのような真理と自己が姿を表すのか。その点はとても楽しみである。

その後、その画家の方が私の絵に対してコメントをしてくださったときに聞いた「アボリジニーアート」について改めて調べていた。アボリジニーには読み書きに用いる文字がないらしく、絵を描くことが彼らにとっての大切なコミュニケーション手段だったそうだ。

言語を超えた形でのコミュニケーションに関心を持っていたことが思わぬ形で繋がっている。また、アボリジニーアートには原始的なエネルギーが内包されていて、そうした絵に近いものを知らず知らず描いている自分は、自分の内側にある原始的な感覚を呼び覚ますプロセスにあるのかもしれない。

その他にも興味深い点としては、アボリジニーの人々は、大自然を崇拜し、自然界には精霊が存在すると信じている。このあたりの自然信仰的なあり方は、自然の中で育ってきた自分にも多分にある。そうした自然信仰的な考え方との一つとして、「ドリーミング」と呼ばれる考え方をアボリジニーの人たちは大切にしている。それは「夢」を示すものではなく、彼らの固有な時間感覚を指し、自然界における天地創造のドラマを辿る行為のことをドリーミングと呼んでいるとのことだ。

彼らには過去や未来という時間の概念はなく、代々受け継がれてきた祖先たちの物語は、時間を超越したものとして認識されているようなのだ。先祖から受け継いだ神話的な物語は、過去の出来事ではなく、現在そして未来へと続くものだと考えてられており、それは今この瞬間もドリームタイムとして脈々と生きているものだと認識しているそうだ。アボリジニーたちがアート作品を残すことによって、文化的記録を行っているのと同様に、自分も言葉・音・絵を通じた自己の人生の記録を継続していきたい。日々十全に生きたという物語の記録をこれからも続けていこう。フローニンゲン：

2020/6/30(火)06:55

5943. 今朝方の夢

時刻はまもなく午前7時を迎えようとしている。冷たいそよ風がフローニンゲンの街を通りにくけてゆく。そよ風の歩調に合わせるかのように、静かな時間がゆっくりと流れている。自分はそうした静かな時の流れの中において、そこで鹿威しのように水を受け取り、水を再び外に流す。自己は鹿威しのような存在なのかもしれない。このイメージは初めて浮かんだものであるため、また考えを巡らせてみよう。

今朝方もまた印象的な夢を見ていた。夢の中で私は、父と大学のOB・OG会に参加することになっていた。場所は海を見晴らせる地方のリゾートホテルだった。

ホテルに到着し、早速講演会場に向かった。会場は、ホテルの1階にあった。父と隣り合わせの席に座ると、ある大企業の社長の先輩が挨拶を始めた。その方は父よりも幾らか年が上のようであり、私はその社長のことを知っていたので、父がその社長の名前を私に尋ねてきた。一応父もその社長のことは知っていたようなのだが、念のため名前を確認したかったようだ。私は、手元の会報誌にも社長の名前の記載があることを父に伝えたが、小声でその社長の名前を教えた。社長の背後には、大きく開放的な窓ガラスがあり、そこから穏やかな海を眺めることができ、その景色は圧巻であった。

講演会が終わった後、父をホテルに残して、小中高時代の親友(SI)と、眼鏡をかけた見知らぬ若い小柄な男性と外出することにした。何か飲み物を買いに近所のコンビニへ行こうと思ったのだが、近くにはコンビニがなかったので、コーヒーチェーン店に行くことにした。

店に到着すると、まだ午後5時半過ぎなのだが、店員たちがもう店を閉めようとしていた。店員2人はアメリカ人の小学生ぐらいの男の子であり、早々に店を閉めて早く帰ったそうにしていた。私は店内に置かれていたガラス張りの冷蔵庫から水のボトルを取り出し、近くに置かれていたグラスを手にとった。すると、店員の男の子の1人が、もう店を閉めると言って少々怒り始めた。私は彼を宥めながら、水を買ってすぐに店を出ていこうと思った。

すると続々と客が店に入ってきて、結局まだ店を閉めることはできなさそうだった。私の親友は少し遅れて店の中に入ってきて、ソファにくつろいで飲み物を飲み始めた。見ると、彼は2Lぐらいのペットボトルに入った炭酸飲料を飲んでいて、私もそこで少しくつろぎ始めたのだが、ホテルでの夕食の時間が迫ってきていると思い、親友にそろそろ帰ろうと述べた。父が迎えに来てくれるとのことだったので、その待ち合わせ場所に向かうことにした。

先ほどまで一緒にいた眼鏡を若い男性とはどこかではぐれてしまったのだが、彼は近くの社宅に住んでいて、そこに戻ったようだった。すると気がつけば、親友と私はその社宅の敷地内にいた。父との待ち合わせ場所は、社宅の敷地の外の通りだった。親友は自転車を持っていたので、それを近

くの公民館に置きに行く必要があるとのことであり、私は彼に父との待ち合わせ場所で会おうと伝えた。すると親友は、足早に自転車を置きに公民館に向かって行った。眼鏡の男性が住んでいるであろう社宅の棟が見えてきた時、社宅の庭に、木の茂みがアーチを作っていて、不思議なオブジェのような形でそれがそこに存在していた。

私はせっかくなのでそのアーチをくぐって行こうとしたが、最後の箇所が子供しか通れないような狭さになっていたので断念した。その棟の向こう側には、子供たちが遊ぶには随分と広い公園があった。そこで私はジャングルジムに上り、親友の現在地を確認しようと思った。すると突然、ジャングルジムのポールが外れてしまった。危うく転倒してしまうかと思ったが、なんとか無事に着地した。

その後、近くにあった滑り台へ移動することにして、滑り台の頂上から親友の様子を見ようと思ったら、背後にその彼がいて、彼と一緒に滑り台を降りて、父との待ち合わせ箇所に向かった。すると、親友と私は気がつけば、フットマッサージ屋にいて、私は足のマッサージを受けていた。担当してくれたのは若い男性であり、彼はオーディオブックで私の監訳書の内容を聞いてくれていた。

私が監訳者だと気づいているのかわからなかったのが、本の感想を聞くがてら、マッサージが終わったところで監訳者であることを名乗った。すると、彼は私が監訳者であることを知っていたようだが、仕事中はあえて話しかけないようにしてくれていたようだった。そこでどういうわけか、ある世界的に有名な戦略系のコンサルティング会社のコンサルタントたちの知性の話になり、彼らの知性がさほど高くはないという点について彼と話をしていた。彼もそのように感じているらしく、最後は彼と笑顔で別れた。マッサージ屋を出たときにも、穏やかな海が遠くの方に見え、心が大いにくつろいでいった。フローニンゲン:2020/6/30(火)07:19

5944. 肌寒いある夏の日の振り返り:血の通った表現物を共有し続けること

時刻は午後7時半に近づいてきている。今、小雨がパラついていて、今日は夕日を拝むことができない。

今日は本当に寒さを感じる1日であり、明日からは7月を迎えようというのに、午後に街に出かけた際には上に羽織るものが必要なぐらいだった。私は長袖で出かけたのだが、道ゆく人たちはジャケットなどを羽織っていて、彼らの方が格好としては正しいぐらいであった。

本日午後に街の中心部に出かけたのは、かかりつけの美容師のメルヴィンに髪を切ってもらったためだった。予約した時間よりも数分ほど早く店に到着すると、私の前の客が突然キャンセルをしたらしく、メルヴィンはソファでくつろいでいた。お互いにすぐに挨拶を交わし、そこからいつものように様々な話題に花が咲いた。話はオランダの国内におけるコロナの状況や、オランダの政治についてなど多岐に渡っていた。様々な話題を取り上げる中で、一貫してメルヴィンは自身の思想から言葉を紡ぎ出しており、それにはいつも感銘を受ける。彼は思想家として人の髪を切っているのだ。いつもそのようなことを思う。

会話の中で、“epiphany(顕現、洞察)”や“revelation(天啓、啓示、顕示)”という意味深い言葉がメルヴィンの口から出てきたので、店を出る前にそれらの単語を彼の手帳に漢字で書き留めて渡すと、とても喜んでくれた。

メルヴィン曰く、ここから2週間は今日のような肌寒い日が続くらしいが、晴れた日のどこかでストリートバスケットをしようということになった。何やら新しいバスケットボールを購入したらしく、それが店に置かれていて、前々からバスケットを一緒にしたいと話をしていたので、近々バスケットを楽しみたいと思う。メルヴィンの店を後にしてからは、そこから歩いてすぐのところにあるコーヒー屋に立ち寄り、オーガニックのコーヒー豆を2種類ほど購入した。

メルヴィンに言われて月間天気予報を確認したところ、本当にここからしばらく肌寒い日が続くようだ。例年は8月に数日間ほどとても暑い日があるのだが、今のところの8月の予報には30度を超えるような日がない。もちろん天気は変動性の産物であるから予測が外れることもあるだろうが、今年は例年よりも冷夏なのかもしれない。

午前中に改めて、呼吸においては吸うよりも吐くことが大事であるのと同じく、取り入れたものをいかに形として外に出していくかが大切であることについて考えていた。もちろん私は心身に取り入れるものはできる限り良質なものにしており、そこから良質なものを外に形として生み出せているのかについて考えていたのである。この点については、偶然ながら、今朝方読んだハーグに住む友人の日記の内容と重なっている。友人がそこで書いていた内容は大変面白く、その洞察は秀逸だと思った。排水管の詰まりから、水ではなくお湯を流し始めたというエピソードから始まり、そこから自

分自身がこの世界に提供するものの質を考えてみたときに、エネルギー量の低い水ではなく、エネルギー量の多いお湯のようなものを提供できているのかという問いかけがそこでなされていた。

私自身も、冷たい表現物ではなく、自分の実存的・存在的な何かが滲み出している血の通った表現物を生み出したいと常々思っている。その巧拙は問わない。とにかく、エネルギー量が高く、自分の血の通った表現物を形として共有し続けていきたいと改めて思った。フローニンゲン:2020/6/30
(火)19:41

5945. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。今朝もまたうっすらとした雲が空を覆っていて、この時間帯はとても寒い。日中も気温がそれほど上がらず20度くらいになるようだ。今日は午後、近所のスーパーに買い物に出かけようと思っていたのだが、その時には少し暖かい格好をした方が良さそうだ。

昨日、ヨガ療法士の友人のブログを拝見した時に、興味深い記述を見かけた。ヨガの世界では、この世界に遍在している生命エネルギーのことを「絶対者ブラフマン」と呼んでおり、「絶対者」という言葉は人を感じさせるが、それが示していることは、実は「場＝フィールド」なのだという点をその友人は指摘していた。

自己を超えた大いなる存在も含め、目には見えない人知を超えたものたちは等しく場的なものとして存在しているのではないかと私も以前より思っていたこととつながる指摘だった。友人はその着想を、井筒俊彦先生の書籍を読むことを通じて得たとのことだったので、尚更共感する指摘であった。

今、自分の人生が肯定的な方向に大きいうねりを上げて進んでいるのを感じる。こうしたうねりも、自分個人の意識空間が生み出しているというよりも、それを超えて、集合的な意識にまで触れるような形で、巨大なフィールドの働きによってもたらされているのだと思う。その産物がまさに運であり、縁なのだろう。自分は今、運と縁の巨大な織物の中に抱擁されている。その確かな感覚がある。これには毎日祈るような感謝の念を捧げていく必要があるだろう。そうした祈りの心と感謝の心がある限り、私は運と縁の豊かな織物の中に抱擁され続けるだろう。

ここ数日間は印象的な夢を朝方に見ていた。今朝方も夢を見ていた。夢の中で私は、自分が実際に通ったのとは異なる高校にいた。そこはとてもモダンな雰囲気を醸し出す校舎を持っていて、また立地に関しても海が近くにあるという素晴らしい学校だった。生徒も先生も全て日本人なのだが、どういわけか、校舎はヨーロッパのどこかの国にあった。そこで流れている時間感覚や落ち着きから察すると、大陸ヨーロッパではなく、北欧のどこかの国であり、しかも海があったから、内陸部ではないことがわかる。

私はある教室で理科の授業を受けていた。どうやら私は前日遅くまで何かに打ち込んでいたらしく、体調がそれほど優れないようだった。実際のところは授業を休むほどでなかったのが、授業に出るのがとても億劫だったので、授業開始と共に、先生に今日はもう帰宅するという旨を伝えた。すると先生は、今日を含めて、私は既に5回ほど授業を休んでいると述べた。それに対して私は、「単位の取得に際して、あと何回休めますか？」と尋ねたところ、「合計で14回まで休める」と先生は述べた。それを聞いた時、随分と休めるのだなと思い、それでは安全を期して12回まで休もうと思った。私は、まだまだ授業を休めることを知ってとても嬉しくなった。その感情が芽生えた時、既に私は教室の外にいて、帰宅準備を始めていた。

いざ帰宅しようとする、西海岸時代の年上のアメリカ人のルームメイトが鬼のような姿になってその場にいた。彼は確かに海軍出身であったから、規律にはうるさい人間ではあったが、根は優しい。そんな彼が鬼の姿になっていて、私は少し驚いた。彼は私に声をかけてきながらも、同時に私を追いかけているようでもあった。言葉と同時に、何か攻撃的なエネルギー波のようなものも彼は口から発しており、私はそれに当たらないように注意していた。

会話をしながら逃げるといのもおかしいことだが、実際にはそうするより仕方なかった。私も両手から特殊なエネルギー波を出すことができるらしかったが、それを彼にぶつけるのではなく、校舎の壁などにぶつけて、そこに抜け穴を作ってそこから逃げていた。最後に、窓ガラスにエネルギー波をぶつけ、私は3階から地面に向かってジャンプをし、エネルギー波を地面に放つことによって着地の衝撃を緩めた。そこからの逃走はスムーズであり、気がつけばもう彼は私を追いかけていなかった。

今朝方はそのような夢を見ていた。実際には、あと1つ大きなテーマの夢があったのだが、それについてはもう忘れてしまっている。そちらの夢では、ある女性友達が現れていたことは確かである。彼女と何か会話をしており、それは特に感情的なチャージのない、比較的中立的な内容だったように思う。フローニンゲン:2020/7/1(水)06:44

5946. コミュニケーションの商品化&ある画家の方との出会い&ロイ・バスカーの 哲学思想への関心

時刻は午前7時に近づきつつある。今し方、ふと自宅の目の前の通りを眺めたら、ジャンパーを羽織って自転車を運転している女性の姿を見かけた。確かに今日はそれくらい寒い。昨日の日記にもこれから数週間の気温について書き留めていたように思うが、数週間を超えて、7月と8月の双方において、暑さを感じる日が今年ほとんどなさそうだと月間予報から知った。そこからさらに先の9月についても調べてみると、当然ながら9月からは一段と気温が低くなっていた。今年はやはり冷夏なのかもしれない。

昨日は街の中心部に行き、かかりつけの美容師のメルヴィンの店と、その近くにあるコーヒー・お茶専門店で立ち寄った。そこでも改めて、この国では人とのコミュニケーションを商品化していないことに気持ちよさを感じた。

現代社会においては、笑顔を含めた感情までもが商品やサービスの一環として組み込まれてしまっており、人間が深層的な部分で触れ合う機会がますます無くなってきている。そうした潮流に与しない形で、この国では笑顔や会話のやりとりが実に自然であり、見知らぬ人と外でちょっとした挨拶を交わすときや、店で店員と話す際に、人間と交流しているという実感が湧く。一方で、笑顔や感情を含め、コミュニケーションが商品やサービスの中に組み込まれている文化の中で人と会話をすると、どこか生身の人間と会話をしている実感が湧かないことがある。このあたりは、人間性とは何なのか、人間性の喪失と復権に関するテーマともつながってきそうである。

一昨日に、この秋の講演会に向けて、対談相手を務めてくださるある画家の方とオンラインミーティングをさせていただいた。昨日も改めて、そのミーティング内容について振り返っていた。そもそも、

私はなぜその方に興味を持ったのかという点について改めて考えていたのである。1つには、2つの意味での共感・共鳴があったように思う。

1つ目の意味としては、その方の著書に書かれていた幼少時代の幾つもの体験が自分の体験と外見上は異なれど、体験内容として非常に重なるものがあり、同様の体験を経て成長してきたのだという意味における共感である。ここではその方の具体的にどのような体験が自分のどのような体験と重なっていたのかについて書くことはしないが、幼少時代に置かれていた精神的状況や、将来の自分に対する千里眼的な力に関してはとても重なることがあった。

今から数年前に偶然ながらその方の作品を最初に目にしたときに、私は思わず、「同じものを見ている人がいるんだ」と呟いた。それが2つ目の意味としての共感・共鳴である。もちろん、全く同じものが見えているわけではなく、見ている世界、あるいは見ている認識次元が同じであるということに大いに感銘を受け、ひどく共感の念を持ったことを覚えている。こうした2つの意味での共感・共鳴をする人というのは現代社会にほとんど存在しておらず、その方の存在を知ったときにはとても嬉しく思ったことが懐かしく蘇ってきた。今回の対談講演会が実現したのも、こうした共感・共鳴と無縁なものではないだろう。

昨日はその他にも嬉しい出会い、ないしは再会があった。私は長らく、成人発達理論に大きな貢献を果たしてきたオットー・ラスキー博士に師事をしていて、彼がテオドール・アドルノやマックス・ホルクハイマーなどのフランクフルト学派の哲学者だけではなく(実際にラスキー博士はこの2人の碩学に師事をして哲学の博士号を取得している)、「批判的实在論(critical realism)」を提唱したことで有名なイギリスの哲学者ロイ・バスカーの仕事をよく言及していた理由が当時はいまいちよくわかっていなかった。というよりも、当時の私は彼らの哲学思想にほとんど興味を持っていなかったと言った方が正確かもしれない。ところが、昨日何か天啓的な閃きのような形で、ロイ・バスカーの仕事を読んでいこうと思ったのである。

バスカーは、インテグラル理論のコミュニティーの一部や科学哲学のコミュニティーではよく知られている哲学者であり、バスカーもまた統合思想の持ち主であり、ウィルバーの思想とも相通じるものがありながら、ウィルバーにはない哲学思想も持っている。

バスカーについては確かに以前一度、彼の書籍を読み進めていこうと思っていたのだが、そのときにはそれを行うことをしなかった。だが昨日、それを行うのは今だという確信めいたものが降ってきた。バスカーの仕事を辿り、そこから自分の思索を深めていくのは今だと思ったのである。そこから私はいつものように、バスカーの主著を調べ、自分の関心を引くものについては全て購入しようと思った。ちょうど7月にはその他にも音楽理論関係の書籍や、霊性(スピリチャリティ)の物質化に関する問題を提起している思想家の書籍などを購入しようと考えていた。今のところ、明日か明後日に購入する書籍には下記のようなものがある。

1. Scientific Realism and Human Emancipation
2. Philosophy and the Idea of Freedom
3. Dialectic: the Pulse of Freedom
4. From East to West: Odyssey of a Soul
5. Creativity, Love and Freedom
6. Reflections on Meta-reality: Transcendence, Emancipation, and Everyday Life
7. From Science to Emancipation: Alienation and the Actuality of Enlightenment
8. Metatheory for the Twenty-First Century: Critical Realism and Integral Theory in Dialogue
9. Fathoming the Depths of Reality
10. The formation of critical realism: a personal perspective.
11. Enlightened Common Sense
12. Roy Bhaskar: A Theory of Education by David Scott
13. Critical Realism: Essential Readings
14. Cutting Through Spiritual Materialism
15. The Craft of Musical Composition: Theoretical Part – Book 1
16. The Craft of Musical Composition: Book 2
17. Traditional Harmony, Book 2: Exercises for Advanced Students

18. A Composer's World: Horizons and Limitations

19. Twentieth-Century Piano Classics: Eight Works by Stravinsky, Schoenberg and Hindemith

この夏は、美学、霊性学、群衆心理学などの書籍を読むことに並行して、ロイ・バスカーという1人の哲学者の仕事も丹念に辿っていきたい。フローニンゲン:2020/7/1(水)07:14

5947. 対象から離れることと本質に近づくこと:現代の教育や人材育成で喪失してしまった発想

今日は朝からとても寒い。室内では長袖長ズボンを着て過ごしている。先ほど、ベジブロスで作った具なしの味噌汁を飲んだ。それは毎朝飲んでいるものなのだが、いつも以上に味噌汁の温かさを感じることができた。今日から7月だということが本当に信じられず、午前中は温かいカカオドリンクと、自らの手で豆を挽いた温かいコーヒーを味わおうと思う。

先ほどふと、自分と日本語の関係について考えていた。自分の中で日本語が読めるようになってきたとふと思ったのは20代後半のことだった。それはアメリカから日本に1年間ほど戻ってきた時のことだったので、29歳ぐらいの頃だったように思う。そこから日本語を味わうことに目覚めた自分が生まれたのをはっきりと覚えている。

それまでは日本語を見る、ないしは眺めることはできても、それを味わうことまではできなかった。そこには母国語への存在的(あるいは実存的)かつ積極的な関与というものがなく、どこかいつも言葉が自分の外に浮かんでいるような感じがあったのだ。しかしアメリカから戻ってきて、改めて日本語に触れたときに、自分の中で何かが変わっていることに気づいた。そこではもう以前のように、日本語が他人のようではなく、本当に自分の内側に響き、浸透してくる存在になっていたのだ。そこからようやく私は日本語を読めるようになったのだと実感し、そこから自分の言葉を見出し、それを彫琢するプロセスが始まったのだと思う。こうした現象がなぜ起こったのかについては、その要因は多数あるだろう。その中でもやはり、アメリカに渡って4年間ほど日本語空間から離れて生活をしていたことは大きなものだと思う。

対象の本質に近づくためには、一度対象から離れてみる必要がある。そのようなことをまさに身をもって体験したのが上記の話である。日本語から一度大きく離れ、徹底的に英語空間の中に浸ろうとしていた自分があの当時にはいて、日本語空間からの脱却が、後々になって日本語空間の深層

部への接近を可能にしたのだと思う。対象から一度離れることによって対象の本質に迫るという現象は、日本語だけではなく、自分の諸々の探究や実践においても見られる現象だ。離れることと近づくことの対極性は、人間発達の肝にあるのだろう。

味噌汁を飲みながらそのようなことを考えていた。そこから、「to someone」「for someone」「with someone」の違いについて考えていた。これは教育においても、成長支援においても大事なことのように思われる。自分の中にあつた問題意識としては、現代社会の教育や人材開発の背後には、絶えず「to someone」の発想が優位であり、それが「for someone」という発想に梱包されているのではないかという考えがある。例えば、「あなたのためを思って、成長のためにはこんなことをしたらいい」という発言はよく見られるものかと思う。ここではまさに、「for someone」という「あなたのために」という名のもとに、結局のところは、その背後には自分や組織の利益が隠れていて、そうした自分の利潤を追求する隠れた発想から何か提言や助言を相手にする(to someone)という構造が見られるように思う。果たしてこれは教育的なのだろうか。果たしてそれは成長や発達を支援することをもたらしてくれるのだろうか。

現代社会の教育や人材開発の背後には、大抵、「～のために」という言葉が隠れていて(それは someoneだけではなく、somethingも含まれているのではと新たに気づいた)、そうしたforという言葉には欺瞞性が絶えず内包されているように思えてならない。

相手のためと言いつつ、それは自分のためであり、何かのためと言いつつ、それは自分が本当に求めるようなものではない。そのように考えてみると、現代の教育や組織内での人材育成というのは、欺瞞性で覆われている、ないしは欺瞞の産物(欺瞞の権化)だと言えるかもしれない。

こうした問題提起は、教育哲学者のザカリー・スタインがまさに行っており、彼は教育や人材育成の根幹には「with someone」の発想が不可欠であると指摘している。まさにそうだと思う。「to」や「for」のように、一方向のベクトルしか持たない発想の教育的関与には、必ずベクトルの起点にある人間の欲求や利益が色濃く混入してしまう。一方で、「with」という発想には、双方向性があり、真に学びや成長をもたらしてくれる教育のあり方には、相互発達的な発想、つまり教える者(導く者)と教えられる者(導かれる者)という外見上の区別があつたとしても、お互いが共に学び合い、啓発しあつていくという関係性が必ずあるはずである。

昨日、かかりつけの美容師かつ友人のメルヴィンが、「近年の欧米社会では、「I」を起点にした形でしか、つまり自分のことしか考えられない形で行動する人が増えてきているように思うが、日本はどうか？」と尋ねてきた。メルヴィンの質問に対する回答は言わずもがなであった。

和の精神の喪失。本来我が国には「with」の発想が伝統的に存在していたはずなのだが、一体いつからその精神を失ってしまったのだろうか。そうした大切な精神は、私利私欲を増大させる金融資本主義的・物質還元的な発想と共に(with)に失われてしまったのだろうか。フローニンゲン：

2020/7/1(水)08:14

5948. ロイ・バスカーへの共感・共鳴

時刻は午後7時半を迎えた。7月の最初の日が充実感と共に終わりに近づいている。今日は1日を通して非常に肌寒く、室内では長袖長ズボンで過ごす時間が多かった。明日は今日もよりも気温が低く、雨が降るらしい。

本日は創作活動に並行して、哲学者のロイ・バスカーの仕事を辿っていた。明日か明後日中にバスカーの書籍の大半を購入しようと思っており、早く彼の思想を学びたい気持ちでいっぱいである。

ロイ・バスカーは元々は、経済学の博士号を取得しようとしていたところから学者としてのキャリアをスタートさせた。経済学に関する博士課程に在籍中のバスカーは、「近代経済学が発展しても、世界から貧困がなくなるのはなぜなのか？」という非常に的を射た問いを己に投げかけた。私はこの問いに大変共感をする。というのも私自身が、「発達科学が発展しても、人間やこの人間社会が未熟なままであるのはなぜなのか？」という問いや、「この世界には芸術作品を含めて美しいものがたくさんあるのに、世界はなぜ美しくならないのか？」という問いを持っているからである。

バスカーはそうした問いから探究を出発させ、経済学ではなく哲学の探究に舵を切った。しかもそれは、上述のバスカーの根源的な問いをもとにしたものであるがゆえに、実践哲学と呼べるようなものである。バスカーにはすでに大きな啓発を受けており、自分自身が実践美学や実践霊性学とも呼べるべきものに関心の矛先が強く向かっていることに気づく。本来、美学にせよ、霊性学にせよ、美や霊性というものがいかに私たち自身や社会と関わっているのかという問いと切っても切り離せないものであるがゆえに、それらは常に実践的なものであるべきなのだと思う。

この数年間、「成人発達理論」という名称を超えて、それは「成人発達学」とでも呼べるような学問体系を根幹に据えながら、多くの学問分野を横断的に探究している自分がいる。私が探究しているのは、究極的には人間存在とは何であり、人間と社会がより善く・美しく発達していくというのはどういうことであり、それはいかようにして実現されるのかということなのかもしれないと改めて思う。そうなってくると、人間存在や社会というのは複雑であるがゆえに、必然的に学際的な探究をせざるを得ないということなのだろう。明日からも引き続き、ロイ・バスカーの仕事を読み、文献購入リストの書籍を早く注文しようと思う。フローニンゲン:2020/7/1(水)19:50

5949. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。今朝は、雨がしたたる音を聞いて目覚めた。家の前の木の葉っぱに雨がしたたる音が一定のリズムを持っており、それは耳に心地良かった。

今この瞬間は雨が止んでいるが、昼前から夕方にかけて小雨が降るそうだ。今日も最高気温は20度に満たず、最低気温は10度ほどだ。アテネの天気予報を確認したら、軒並み晴天続きのようであり、最高気温は35度前後、最低気温は23度ほどと、フローニンゲンとの差は歴然としている。今月末にはよいよアテネに行くことになったが、その時にはフローニンゲンとの気候の差を大いに感じることができるだろう。

今日もまた創作活動と読書に打ち込みたい。読書に関していえば、昨夜から読み進めた群衆心理学の書籍を本日も読み進めていく。それは、“The Age of the Crowd: A Historical Treatise on Mass Psychology (1985)”と呼ばれる書籍であり、群衆心理学の種々の論点をかなり網羅的に取り上げているだけではなく、著者のセルジュー・モスコヴィツシの洞察は非常に深く参考になる。

本日はこちらの書籍を読み進めることに加えて、文献リストにある7月に購入予定の書籍を注文しようと思う。今回は合計で15冊ぐらいの注文になるだろうか。そのうちの半分ほどはイギリスの哲学者ロイ・バスカーの書籍になる。バスカーの「批判的实在論(critical realism)」を深く理解したいと思っており、それを成人発達学と関連付けるだけではなく、霊性学や美学とも関連付けていきたいと思う。

今朝方は少しばかり印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、サッカースタジアムの中にいた。私は自分の意識を用いて、サッカーコートの上にも視点を移動させることもできたし、観客席にも視点を移動させることができた。つまり私の意識は、コート上にあることも可能であり、同時に観客席にあることも可能だった。その時にはサッカー日本代表の一番の試合が行われていた。おそらく、ワールドカップの出場が決まるか否かの重要な試合のようだった。

試合も終盤に差し掛かり、日本代表はPKのチャンスを得た。そこでキッカーとして登場したのは、往年の名選手であり、その選手はPKを止められたことがほとんどないと言えるぐらいにPKの成功確率が高かった。いざその選手が助走に入り、キックをした時、相手のゴールキーパーが同じ方向に飛んだので、私は止められたかと思った。しかし、蹴られたボールは地を這うような軌道であったため、キーパーの手に触れられることなくゴール右隅に決まった。その時の私の意識はゴール裏の観客席にあり、キックの瞬間の映像がスローモーションで再生された。

その選手は、キーパーを反対に飛ばせるために体の向きを巧みに変えてフェイクを入れたのだが、相手のキーパーはそれに引っかからずにボールの方向に飛んだ。しかしそれでもコースが良かったので、キーパーはボールに触ることすらできずにゴールネットを揺らした。ゴールが決まった瞬間、その選手はホッと胸を撫で下ろしているようだった。

次の夢の場面では、私は小中学校時代の親友(HS)と、小中学校時代の女性友達2人と話をしていた。すると、2人の見知らぬ中国人が現れ、彼らは彼女たちを誘って釣りに行こうと申し出た。親友と私は、彼女たちのことが心配だったので、私たちも半ば強引に釣りに同行することにした。片方の中国人が、「それじゃあ、午後2時半に迎えに来るね」と彼女たちに述べた時、私は彼女たちの返答よりも早く、「ありがとう、楽しみにしてるよ」と述べた。2人の中国人はもちろん親友と私を釣りに誘っていないため、一瞬戸惑った表情を浮かべていた。

すると、彼らが今日本語の訓練を受けている場所に意識が移動した。彼らは午前中は日本語のレッスンを受けているらしく、iPadを用いて日本語の書き取りをしていた。その際に、教師の女性が、言葉を書くだけでなく、書いた言葉のイントネーションや言葉から喚起されるものを絵として表現することを要求しており、それは面白いと思った。片方の中国人は、黄緑色を選択し、それを筆を用

いて線画のようなものを描いていた。そのクラスが終わり、2人の中国人は宿泊している場所に戻った。どうやら彼らは大きな公衆トイレの中に寝泊りしているらしかった。

私とそのトイレに行くと、彼らは小さいびきを立てて寝ていた。そこは比較的綺麗なトイレだったが、それでもそこに布団を敷いて寝ることに対してはとても違和感があった。私は一応彼らに気を遣って、音を立てないように用を足そうと思った。フローニンゲン:2020/7/2(木)06:38

5950. 仮眠中のビジョンと現代人の一側面

時刻は午後7時を迎えた。今、自宅上空の空は灰色の雲に覆われているが、遠くの空には夕日が沈んでいくのが見える。

今日は午前中に激しい雨が降り、夕方から晴れ間が見えた。1日を通して気温は低く、日中を除いて長袖長ズボンで過ごしていた。

午後に仮眠を取っているときに、印象的なビジョンを知覚した。知覚空間に楽譜が立ち現れ、午前中に作っていた曲の一音一音が鮮明にビジョンとして現れたのである。それは本当に正確なものであり、五線譜上のどこにどの音を配置しているのか等を含め、和音の構造も捉えることができていた。ときには仮眠のみならず、頻度は低いが夜の夢にも楽譜が現れることがあるため、作曲実践が無意識の次元まで浸透し始めていることがわかる。

午後に改めて、一昨日の友人メルヴィンとの対話を思い出した。彼の話の回想していると、カナダの哲学者チャールズ・テイラーがかつて述べたことを連想した。テイラーは、「現代社会は、私生活においてはロマン主義的傾向(自我尊重、感情・欲求の解放を最優先にする傾向)があり、公的生活においては功利的・道具主義的傾向がある」という趣旨のことを述べていた。それは至言だと思う。おそらく、より正確には、公私共にロマン主義的かつ功利的・道具主義的な傾向にあるのが現代人なのではないかと思う。自我が肥大化し、それをさらに肥大化させる形で様々なものを道具化し、消費し、そして再び自我を肥大化させる。そのような人間像が浮かび上がってくる。

今日は午後に時間を取って、ロイ・バスカーの書籍を14冊ほど購入し、そのほかに1冊ほど、霊性の物質化の問題についてチョギャム・トゥルンパが指摘した書籍を購入した。前者の大抵の書籍はロイ

・バスカー本人が執筆したものか、他の学者との共著であり、数冊ほどバスカーの書籍の解説書がある。本日購入した書籍は全てアテネ旅行の前に到着する。中には薄い書籍もあるので、アテネ旅行に1冊ほど厳選して持って行ってもいいかもしれない。結局音楽理論に関する書籍は購入せず、それらは秋以降に購入したいと思う。来月の購入予定の書籍としては、オットー・ランク、ハーバート・マルクーゼ、アーネスト・ベッカー、経済・社会に関するシュタイナーの書籍、ジョン・サールの書籍を購入しようと思う。バスカーの書籍が到着するまでは、手持ちの書籍の中でバスカーの批判的实在論について言及している書籍を読み進めたり、本日ダウンロードした論文などを読み進めていこうと思う。ここからの新たな探究がまた楽しみになってきた。フローニンゲン:2020/7/2(木) 19:26

5951. 発達科学の研究成果の価値判断について:インテグラル理論の果たす一つの役割

時刻は午後7時半を迎えた。今週も早いもので、明日を終えれば週末を迎える。気がつけば7月を迎えていて、おそらく気がついたときには今月末のアテネ旅行の日がやって来ているだろう。そして、そこから秋の日本への一時帰国もあつという間にやって来るような気がしている。

昨夜就寝前に、何気なく本棚を眺めていたところ、“Systems Thinking, Critical Realism and Philosophy (2014)”という書籍があることに気づき、パラパラと中身を眺めてみたところ、いくつか下線や書き込みがなされていて、随分と前に一読していたようだった。

内容についてすっかり忘れていたのだが、タイトルにあるように、ロイ・バスカーの批判的实在論についての言及がなされているため、改めてその箇所を読んでみると、得るものが多くあり、今日は群衆心理学の書籍を脇に置いて、こちらの書籍を読み返していた。いくつもハッとさせられるようなことが書かれていたのだが、その中でも発達科学の研究成果の価値判断の問題に関連する記述をもとに考え事をしていた。

科学的研究は記述的であり、そこに価値判断は含まれるべきではないという考え方があり。確かに、真善美の括りで言えば、科学研究は真に該当するものであるため、科学的研究の成果をもとに「べき論」のような価値判断を行うことは慎むべきという態度がある。そして、こうした態度は発達科学の研究成果の取り扱いに関する議論においても見られる。数年前までは私もこのような態度で発達科学の研究成果を捉えていた。しかし、教育哲学者のザカリー・スタインの書籍を読み、そうした

態度や発想よりも一歩先に進んだ考え方があることに気付かされたのである。その点については以前の日記の中に書き留めていたのだが、今日もそのテーマについて考え、少しばかり補足的な考えが浮かんだ。

自分自身が科学研究のコミュニティーの中で研究をしていたこともあり、身を持って薄々感じていたことが本日明確なものになった。端的には、科学研究というのは、価値や評価を無菌化する形で進めることはできないという点である。

研究テーマの設定、研究仮説の創出、研究手法の選択、そこには諸々の価値判断がすでに混入している。そもそも、絶えず価値判断をしながら生きている人間が研究をしているのだから、それはそうだろう。科学研究のプロセスの至るところに価値判断が混入し、そもそも科学研究とは先人の研究の上に積み重ねる形で行うものであり、そうした先人たちもことごとく固有の価値判断をもとに研究をしているのだから、彼らの研究成果や概念に立脚すれば、何重の意味においても価値判断が積み重ねられることになる。だから科学的研究成果というのは、どうしても価値負荷的 (value laden) にならざるを得ない。

そうであるにもかかわらず、例えば発達研究の成果を取り上げる際に、「その発見事項について良し悪しの判断をするべきではない」というべき論は非常におかしいものであり——「発達研究に伴うべき論の矛盾性」とでも名付けることができるだろうか——、「その発見事項には何らかの価値判断も含まれておらず、純粋に記述的なものとして扱うべきである」というべき論もまた非常におかしなものであることがわかる。そうした価値判断を避けようとする姿勢が、逆に発達研究をもとにした議論や実践を歪めてしまうのではないかと思う。重要なことは、そもそも純粋に記述的な科学研究など存在し得ないのであるから、得られた研究成果に対する価値評価に関する議論をより緻密なもの、より豊かなものにしていくことなのではないかと思う。真善美のどの領域も蔑ろにしないインテグラル理論の果たす役割の1つには、そうしたものがあるかと思う。

自然科学の研究ならまだしも、人間や社会を対象にした社会科学の研究成果が純粋に記述的であることは不可能であるという前提に立ち、そうであればいかなる価値判断が求められるのかを慎重に議論していくことによって対話や実践を育んでいくことが大切になるだろう。

「発達研究で得られた成果は記述的なものであり、価値判断の伴うものではない」という主張は、善や美に関する思考停止状態の現れであり、そうした主張をしている限りにおいて、人間や社会をさらに育んでいくより豊かな対話や実践など実現しないだろう。

このテーマについては、ロイ・バスカーの「批判的実在論」をもとにすれば、もっと別の観点から考えを深めることができそうである。これまでの自分は認識論をベースに無意識的に考えを展開していることに気付かされ、バスカーが「存在論が認識論を決定づける (Ontology determines epistemology) — 言い換えれば、beingがknowingを決定づける」と述べているように、あえて存在論に強く立脚する形で種々のテーマに対する自分の考えを深めていこうと思う。本日購入した14冊のバスカーの書籍はその基盤を形成してくれるだろう。フローニンゲン:2020/7/2(木)20:02

5952. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。ここ数日間は、起床直後の空は雲に覆われていて、朝日を拝むことができなかったが、今日は朝日を拝むことができている。今、黄金色に輝く朝日が赤レンガの家々に降り注いでいる。その光はとても優しく、温かそうでもあり、小鳥たちや街路樹が喜んでいるかのようだ。

今日もまた肌寒い気温なのだが、ここから1週間も気温が高くなる様子は一切見られず、今年は本当に冷夏のようなのだ。そう言えば、直近の冬が暖かく感じ、極端なマイナスの世界になる日がほとんどなかったように思う。暖冬の後には冷夏がやってくるのだろうか。暖冬であれば冬が過ごしやすく、冷夏であれば夏が過ごしやすいため、私としてはその方が有り難い。

今日は午後に、街の中心部のオーガニックスーパーに立ち寄り、必要なものを購入しよう。それでは、今朝方の夢について早速振り返りたい。

夢の中で私は、父と会話をしていた。会話の流れで、どういわけか一緒にテレビゲームをしようという話になった。厳密には、父がプレーするのを私が横で見守り、必要な時に助言をするという形でゲームをしようということになったのである。そのゲームはとても懐かしく、マリオブラザーズのようなゲームだった。ゲームの進行過程においては、立体感のあまりない形で進んでいくのだが、ボスと対戦するときだけ3Dになり、格闘ゲームのような形になった。

最初父はキャラクターの操作に慣れておらず、思わず笑ってしまうような形で、キャラクターが3回ほど死んでしまった。1回目は最初に現れた小さなノコノコのような敵に体当たりしてしまって死に、2回目はノコノコを踏もうと思ってジャンプしたのはいいものの、着地地点を誤り、ノコノコの目の前に着地してしまい、ノコノコにぶつかってしまい死亡した。3回目は、最初のノコノコを倒した後に、勢いよく再びジャンプをして、大きな溝を越えようとしたのだが、そこでも距離感を間違えてしまい、勢いよく溝の中に落ちて行ってしまった。

そのような微笑ましい事柄が3回連続続いたのだが、そこから父は徐々に操作に慣れていった。そして驚くべきことに、ゲーム開始からわずか2時間で、最後のボスを倒したのである。しかも私は、ゲームの難易度を最大に設定しており、ボスはどれもすこぶる強かった。それであるにもかかわらず、まさかそんなに早くゲームをクリアするとは思ってもみなかった。そのような短時間でゲームをクリアした父に対して誇らしく思っていたところ、前職時代の先輩の男女が2人その場に現れた。2人に何をしているのかと尋ねられたので、ちょうど今あるゲームを父がクリアしたところだと伝えた。

2人もそのゲームについて知っていたようであり、敵の強さを最大にして、初めてそのゲームをプレーしたにもかかわらず、2時間でクリアしたことを2人も驚いていたようだった。父のスマホにはボスを倒した時の写真やクリアした瞬間の写真などが収められており、父は嬉しそうにそれらの写真を2人に見せ始めた。その時の父はとてもラフな格好をしていて、2人の先輩たちはこれから仕事のように、身なりがしっかりしていたので、格好が対照的であった。父の写真を見ている最中に、女性の先輩の方が、チラッと父のお腹を見た。父のお腹はTシャツ越しに膨らんでいて、それをその先輩は見たようだった。

その後、そう言えば私もこれからオフィスで仕事があると思い出し、そこで父と別れ、2人の先輩と一緒にオフィスのフロアに向かった。オフィスの1階でエレベーターを待ち、それが到着して中に乗り、目的階のボタンを押そうと思ったら、それが見当たらなかった。エレベーターは、3階まではそれぞれの階で止まり、そこからいくつかの階が飛んでいて、次に止まり始めるのは7階からだった。オフィスは5階にあるため、3階まで行ってそこから階段を使おうと思った。すると、2人の先輩は最初から階段を使っていくと言い始め、結局エレベーターを使ったのは私だけだった。

3階で到着し、そこから階段を使って上の階に登り始めると、4階の踊り場で、オフィスで隣に座っている女性の先輩と遭遇した。その方とはどうやら昨日口論をしていたらしいのだが、私はすっかりそのことを忘れていて、いつもと同じように挨拶をした。するとその先輩は、昨日の出来事を綺麗さっぱり忘れていた私に驚き、逆にそれはとても清々しいと笑って挨拶を返してくれた。この件でまた関係性が深まり、後でまた席に戻って話をしようということになり、その場はそこで別れた。

オフィスに到着すると、部屋の奥の方の一角がとても賑やかだった。見ると、先ほどの2人の先輩がワインを飲みながら仕事をしているようであり、ほろ酔い加減で仕事を進めていた。その姿はとても微笑ましかったが、他の方々はかなり真剣な表情で仕事に向かっていたので、その点だけは心配だった。

いざ自分の席に着こうとすると、私の席の向かいには本棚がずらりと並べてあって、本棚の目の前の通路で同期が電話をしていた。彼は私よりも幾分年上であり、イギリス圏の大学院を卒業していた。その彼がイギリス英語で他国のオフィスのメンバーと会話をしている姿を見た。

私は席につき、いざ仕事を始めようとしたが、特にその日は仕事がなかったので、経済誌でも読もうかと思って、足元にあったビニールに包まれた未開封の経済誌を手を取った。ビニールの封を開け、経済誌を取り出していざ読もうと思ったら、先ほどの2人の先輩が私のところにやってきて、昨日提出した数学の問題の解答について質問をしてきた。女性の先輩は、私の計算と文字の緻密さに驚いているようだった。一方、男性の先輩も私の解答のアプローチは正しそうだと認めながらも、変数の値の範囲に少し不備があるのではないかと指摘してきた。それを受けて再度解答を眺めてみると、確かに変数の値の範囲をもう少しきちんと場合分けする必要があると思い、すぐに修正する旨を伝えた。

今朝方はその他にも、小中学校時代の親友(YU)が現れ、彼と車を運転しながらどこかに向かっている夢があった。入り組んだ山道を車で走っており、注意しながらハンドルを握っていたことを覚えている。実際には、運転していたのは私でも彼でもなく、別の誰かであり、私は運転しているその人物の心身と同一化する形で車を操作していた。フローニンゲン:2020/7/3(金)06:45

時刻は午前7時にゆっくりと近づいている。今朝は肌寒く、長ズボンと分厚い長袖を着て午前中を過ごすことにした。

昨夜ふと、自分の中で新しい探究が始まっており、それに伴っていくつか伝えたい事柄が芽生えてきているので、近く新しい書籍を執筆してみようかと思った。それは実践霊性学と実践美学に関する書籍であり、分かりやすさを重視した実用書を想定している。どのような趣旨の書籍なのか、どのような形式の書籍なのかを含めて、色々とアイデアが出てきたので、それをワードに書き留めていた。どこかのタイミングで、そのメモをもとに企画書を書いてみようかと思う。

新しい書籍の執筆に向けての意思が芽生えたところで、ふとソファに積み上げられている書籍の山を眺めた時、美学書のコーナーに目が行った。興味深いタイトルの書籍を手にとって眺めてみると、それらはフローニンゲンの街の古書店ISISで今から2年前に購入した書籍のようだった。購入した日付を見ると、それはアムステルダムで開催されたジャン・ピアジェ学会に参加する前のようだった。私はこの学会で研究成果を発表したことを1つの区切りとして学術機関に所属することから離れた。そうした行動を促す新たな関心の芽生えはすでにその学会の前からあったということがわかる。

手持ちの数冊の美学書を改めて読み進めていこうと思う。また来月には、私が師事していたオットー・ラスキー博士の師匠でもあったテオドール・アドルノが美学について論じた“Aesthetics”と“Aesthetic Theory”を購入し、ラスキー博士が論文の中でよく言及していたハーバート・マルクーゼが執筆した“The Aesthetic Dimension: Toward a Critique of Marxist Aesthetics”という美学書も購入したい。その他にも、ロイ・バスカーが提唱した批判的实在論をもとにした興味深い美学書“The Space that Separates: A Realist Theory of Art (Routledge Studies in Critical Realism)”というものを見つけ、アドルノの美学について解説した“Adorno’s Aesthetic Theory: The Redemption of Illusion”、“The Fleeting Promise of Art: Adorno’s Aesthetic Theory Revisited”、“Adorno and Art: Aesthetic Theory Contra Critical Theory”の3冊と合わせて購入したい。それと美学に関する議論の全体像を知りたいため、分量としては多いが、網羅的な“Aesthetics: A Comprehensive Anthology”という書籍も購入する。それらの書籍に合わせてアーネスト・ベッカーの書籍を5冊ほど、経済・社会に関するシュタイナーの思想を扱った書籍を4冊ほど購入しようかと思う。9月には、スロ

ベニアの哲学者スラヴォイ・ジジエクの書籍を何冊か購入しようと考えており、今後の読書のリストはさらに続く。

昨日改めて、読書というのはやはりマインドにとっての刺激と養分をもたらすと思った。もちろん摂取のし過ぎは食べ物と同様に負の影響を与えうるが、適度な読書は滋養をもたらす。読書を通じて、自分のマインド及びあり方を慈しみながら養っていこう。そのようなことを昨夜改めて思って就寝をした。フローニンゲン:2020/7/3(金)07:08

5954. 社会科学に潜む別種の「フラットランド化」：「発達は一概に善ではない」という主張に留まることの問題

時刻は午前11時を迎えたが、依然として肌寒い。今日は厚手の長袖に長ズボンを履いて過ごしている。先ほど、昨日考えていたテーマに対してまた少し考えていた。

イギリスの哲学者デイヴィッド・ヒュームは、「である(is)」から「べきである(ought)」を導き出すことはできないと述べたが、それではそもそも「べきである」という主張はどこから来るのだろうか？ということについて考えていた。

自宅の目の前の通りには美しい花々が咲いていて、それらを見て私は「あれらの花々は美しい(Those flowers are beautiful)」と思った。そして、「私はあれらの花々を大切にすべきだ(I ought to value or protect them)」という思いが芽生えた。そこから、私たちは何かしらの「である」ことからしか「べきである」という主張を導き出すことはできないのではないだろうかと思ったのである——「である」の中には、「あれらの花々には生命がある(Those flowers have life)」という「is」以外の一般動詞形で表現される事実も含まれる——。

そうした疑問と同様の問題意識を哲学者のロイ・バスカーも持ち合わせており、バスカーはまさにヒュームのそうした発想を否定する形で、「説明的批判(explanatory critique)」という方法を用いて、「である」から「べきである」を導く道を見出していった。この方法は、発達科学の発見事項に留まらず、霊性学や美学に関する事柄にも適用することが可能であろうし、適用するべきだと思う。そうでなければ、科学的な発見事実が実践につながっていかず、両者が分断されたままになってしまう。

ヒュームの事実と価値を分けるべきだという主張は、どこかデカルト的な二分法的思考のようにも見えてくる。バスターが指摘するように、とりわけ社会科学の対象は内在的に価値負荷的 (value-laden) であるという点を見落としてはならない。

社会科学の価値負荷的な特性を見逃してしまうと、例えば、Aという人間が何者かによって殺された場合において、本来は「Aは殺された」と述べるべきところを「Aは息をすることを止めた(あるいは心臓を停止させた)」というような形で記述されることに留まり、殺人に対して、法律学(刑法)、心理学、社会学といった社会科学の観点から議論する余地が喪失してしまい、生物学的な観点からしか議論ができなくなってしまう。端的には、社会科学から「べきである」という観点を奪ってしまうことは、別種の「フラットランド化」なのではないかという問題意識がある。とりわけ発達理論は、人間や社会の健全な発達を実現することを目指し、解放をもたらすことを希求しているものであるから、尚更そうしたフラットランド化現象を乗り越えていく必要があるだろう。発見事項から規範的要素を汲み取ること及び作り出していくことを怠れば、健全な発達や解放をもたらす実践を導くことなどできない。

発達理論のコミュニティーの一部の中では、科学的な発見事実と価値を分けるべきであり、発見事実に対して価値的評価を下してはならないという風潮が見られる。これは、発見事実と価値をごた混ぜにするコミュニティーの中に蔓延している発想(例:「発達とは善である」という発想)よりも成熟していることは確かであり、事実と価値を分けるべきなのだが、そこで議論をやめてはならない(例:「発達は一概に善ではない」という主張をするだけで終わってしまう発想)。重要なことは、事実と価値の対話であり、発見事実からいかなる価値や評価を下すことが求められるのかを議論しなければ、何らの救いも解放も私たちにもたらされないだろう。

発達理論が私たちにもたらしてくれる叡智を実践につなげていくためには、「発達とは善である」という短絡的な発想を超え、「発達は一概には善ではなく、事実と価値を分けるべきである」というべき論をさらに対象化させ、それを乗り越える形で、より高次元のべき論を模索していくことが要求されるだろう。そして、新たな形で生み出されたべき論が、どのような世界観や価値観に立脚して生み出されたものなのか、それを生み出す社会文化的なコンテクストを含めて、絶えず自覚的であるという姿勢が求められる。そのようなことを考えてみると、発達について議論するというのは、絶えず内省的 (reflective) であり続ける必要があり、同時にそうした内省に耐え続けるという意味で「内省的耐

性(reflective patience)」のようなものが求められるように思う。自らの思考を他者や社会に無防備に委ね、自律的思考ができなくなっている現代人にとっては、こうした耐性を獲得することは容易でないのは確かだが。フローニンゲン:2020/7/3(金)11:20

5955. 認識論的・存在論的な意味での変容と解放をもたらす芸術作品

時刻は午後7時を迎えた。今はうっすらとした雲が空を覆っている。そのため夕日を拝むことはできないが、穏やかさは継続して漂っている。

夕食を作っている最中にふと、私たちの存在を超越した対象を取り扱う芸術作品は、認識論的にも存在論的にも意義があるのではないかと思った。認識論の観点として、そうした芸術作品は私たちの認識を拡張するという点に意義がある。その作品が存在していなければ気付けなかった認識世界や事柄があれば、まさにその点に認識論的な意義がある。

また、存在論の観点として、私たちの存在を超越した対象を取り扱う芸術作品は、そうした存在者に居場所を与えることによって、私たち自身も自己の居場所を確保・再確認するという点に意義がある。言い換えれば、そもそもそうした作品のおかげで、気付けなかった存在者に存在場所を与え、それが自分の存在に適切な場所を与え直したり、今自分がいる場所とは違う場所を提供するという点に存在論的な意義があるとふと思った。

超越的な存在を取り上げた芸術作品を通じて、そうした対象を認識することはその存在の居場所を把握することにもつながる。そのようなことを考えていると、さらにふと、何かを認識するというはその存在を把握するということであり、そもそもその存在が存在している居場所があるということがさらなる前提として存在していることに気づいた。端的には、そもそも認識に先立つ形でその存在が存在しているということから、存在論は認識論に先立っていると言えるかもしれない。これはまさに、バスキアの「存在論は認識論を決定付ける」という主張の1つの意味に近いものなのかもしれない。

午後に、現在開催中の「一瞬一生の会」の受講者の方々が執筆しているリフレクションジャーナルを読み進めていた。いつも私は皆さんのジャーナルから色々なことを学ばせてもらっており、そこから新しい知識や観点を得て、自分の思考を深める機会をいただいている。

本日読んでいたジャーナルの中で、「改心」と「回心」の違いに関する記事が興味深かった。日本語では通常「改心」という漢字がよく用いられるが、キリスト教では新約聖書のギリシャ語「メタノイア」に対して「回心」という漢字を当てることによって、そこに特別な意味合いを込めようとしているとのことだった。前者の「改心」というのは、悪事や間違いに対して心を改めることを意味している。一方、後者の「回心」は、宗教体験の意味が含まれており、神との関係を通して本来の在り方へと転回するという意味があるそうだ。この記述を見たときになるほどと思った。

上述の話と関連づければ、自己を超えた存在を取り上げる芸術作品を通じて、そうした存在に思いを馳せ、それらと自分との関係性を内省することで、自己が本来の在り方に転回していくことにつながるのではないかと思った。そこには自己発見があるだろう。そうした自己発見は、多分に変容的であり、多分に解放的だろう。そうしたことから、超越的な存在者を取り上げる芸術作品には、変容的な作用や解放的な作用が内包されており、それらの作用は認識論的かつ存在論的なものなのだと思う。フローニンゲン:2020/7/3(金)19:20

5956. 今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えた。今朝は起床した瞬間から雨音が聞こえて来た。今もこの時間帯には小雨が降っており、外はとても肌寒い。天気予報を見ると、今日から3日間は小雨が伴う日が続く。気温に関しても、ここからの1週間は、最高気温が18度ほどの日が続き、まだまだ寒さを感じる日々を過ごすことになるだろう。実際に今は冬の時期と同じ格好をして室内で過ごしている。かろうじて靴下を履く必要がないぐらいだろうか。

今朝方は少しばかり調べ物をしていた。1つには哲学者のロイ・バスカーの批判的実在論に関するものであり、もう一つはSQ (spiritual intelligence)に関するものだ。とりわけ後者については、改めて関連書籍を読んでおこうと思い、8月に購入する予定の文献リストに3冊ほどSQ関連の書籍を加えておいた。ここからしばらくは、批判的実在論の理解を深めるためにバスカーの書籍を読み、批判理論についての理解を深めるためにハーバマスの書籍を読んでいこうと思う。それ以外にも、実践美学に関しては今道先生の書籍を、実践霊性学に関しては上述のSQの書籍やシュタイナーの書籍を読み進めていこうと思う。

それでは今朝方の夢を振り返り、本日の活動に入っていきたい。今日は創作活動や読書だけではなく、「一瞬一生の会」の発展学習教材として音声ファイルをいくつか作ってほしいと思う。

夢の中で私は、地元の国道沿いの山道を歩いていた。隣には2人の友人(NK & HY)がいて、彼らと話をしながら山道を上っていた。1人の友人(NK)がバイクを押しながら山道を上っていて、話の話題はそのバイクのことになった。それは結構な値段のバイクらしく、1つ1つの部品にこだわりがあるそうだ。そこで私は、そのバイクに乗ってみたいという思いが湧いて来たのと、歩いてこの山道を上ることが大変になってきたので、友人にバイクを貸してほしいとお願いした。それは高価なバイクだったから、友人も一瞬戸惑っていたようだったが、結局バイクを貸してくれることになった。ところが私は考えを改め、やはりバイクには乗らず、引き続き歩いてこの山道を上っていくことにした。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は芝でできたサッカーグラウンドの上にあった。その芝が人工芝なのか天然芝なのかはわからないが、サッカーに適した環境であることは間違いなかった。そこで私は、今でも活躍する日本人の天才的なサッカー選手と一緒にボールを蹴っていた。その選手はとても温厚で、性格が良いことでも知られていて、私に対してもとても優しくかった。

しばらくパス交換をした後に、私はその選手から教わったトラップの仕方やパスの仕方を友人にも教えようと思った。すると、私の体は小学生ぐらいの時のものになり、周りを見ると、小学校6年生の時のクラスメートがたくさんいた。どうやらこれから体育の授業が始まるようであり、そこではサッカーをすることになっているようだった。

クラスメートは3つのチームに分かれており、私は同じチームの女子たちにトラップの仕方を教えることにした。彼女たちは、ボールを止める際にボールに向かって行ってしまいう傾向があり、それだと逆にボールを弾いてしまうので、トラップの基本はボールに乗っている力と同じ向きに足を少し引くようなイメージでボールを止めることだと伝え、それを実演してみせることにした。すると、彼女たちは徐々にうまくボールを止めることができるようになってきた。そこからしばらく練習を続けていると、自然と夢の場面が変わった。

今朝はその他にも夢を見ていたような気がする。このように毎日夢について思い返していると、夢から学ばされることや考えさせられることが多々ある。また、夢の振り返りは紛れもなく自己発見と精神の治癒と変容につながっていることを実感する。

ちょうど数日前から見始めたアメリカのテレビドラマ“Falling Water”は夢を題材にしている。そこでは1つの同じ夢を複数人が共有して見ているという設定になっており、このテーマは以前に私も考えていたことであり、大変興味深く視聴を続けている。自分の夢を誰かと共有している可能性や、誰かが自分の夢を見ている可能性、また自分が実は誰かの夢の世界の中にいる可能性など、夢に関する関心は尽きない。フローニンゲン:2020/7/4(土)07:28

5957.「忘れたことと忘れさせられたこと」:社会実践性を希求する実践霊性学・実践美学・
成人発達理論・インテグラル理論

今、時刻は正午に向かっている。今朝は小雨が降ったり止んだりを繰り返していて、今は小雨が病んでいる。今朝はとりわけ気温が低く、今も引き続き暖かい格好をして、温かいコーヒーを飲んでいる。

午前中にふと、評論家の江藤淳の書籍の中に、「忘れたことと忘れさせられたこと」というものがあることを知った。この書籍のタイトルから、色々と考えさせられることがあった。1つとして、今の私の関心事項である霊性や美に関して、現代人はそれらを忘れてしまったという側面があるのと同時に、現代社会の風潮や仕組みによって「忘れさせられてしまった」という側面もあるのではないだろうか、という考えが浮かんだ。

そもそも、霊性や美というものが存在していることに気づき、それらに対する理解を育みながら、自分自身の霊性や美というものを涵養していくことは大事なのだが、それらがそれまでなぜ見えなかったのかという問題意識を持つことと同時に、ひょっとしたらそれらが見えなくさせられてしまっていた可能性はないかを考えてみるのが重要のように思える。

とりわけ現代社会に蔓延する風潮や仕組みは、霊性や美というものを抑圧・隠蔽する傾向にあり、むしろそれらを抑圧・隠蔽することによって自身の風潮や仕組みを肥大化させているようにすら思える。現代の風潮や仕組みによって抑圧・隠蔽されてしまっているものの中にある価値を再度見直す

ことに加えて、そうした抑圧・隠蔽を働く現代の病理を見つめていく慧眼のようなものを持つことが私たちに要求されているのではないだろうか。

成人発達理論にせよ、インテグラル理論にせよ、それは私たちの認識世界を開くという認識論的な価値があるのと同時に、これまで見過ごしていたものたちの存在を認め、それらに存在場所を与えるという存在論的な価値もある。それらの理論を学ぶことを通じて、社会の盲点になっている事柄を見抜き、それが内包する価値を検証していくような姿勢を育てていくことは大切だろう。そして、それまで存在が忘れ去られてしまっていた存在を見つめることを通じて、そうした存在を抑圧・隠蔽し、疎外させるこの現代社会の風潮や仕組みを吟味していくことが、社会をより良き方向に発達させていくことに不可欠のように思える。

そのように考えてみると、成人発達理論やインテグラル理論というのは、極めて社会実践的な理論であり、もしそうした役割を骨抜きにする形でそれらを学習するのであれば、それらの理論の真価を捉え損ねているように思える。それらの理論を通じて単に自閉的に自己理解だけを深めることは、ある意味自我の肥大化を促すことであり、ピアジェが述べたように、発達の本質とは自我中心性の縮小なのであるから、それらの理論が本来目指すべきものから逸脱していることを示唆している。

今、私が探究を進めている実践霊性学や実践美学というものも、そこにあえて私が「実践」という言葉を付したのも——後者は美学者の今道友信先生の言葉だが——、霊性学や美学というものを社会の課題に紐付け、現代において忘れてしまっている、あるいは忘れさせられてしまっている人間本質の霊性や美というものを、社会実践的な形で再発見し、それらを育む道を提示していきたいという自分の問題意識があるからなのだろう。これまでの自分が専門にしてきた成人発達理論やインテグラル理論というものに対しても、そうした問題意識に根ざした形で探究と実践をこれからも続けていきたい。フローニンゲン:2020/7/4(土)11:54

5958. コロナの蔓延をきっかけに群衆化を強める現代人

時刻はまもなく正午を迎える。正午前に、もう1つだけ日記を書き留めておこうと思う。午前中に評論家の江藤淳について調べていたところ、まだ彼の著作の中で読んでいないものがたくさんあり、この秋に日本に一時帰国した際には何冊か彼の著作を読んでみようと思った。文体について彼が書

いた書籍の中で、「私たちの行動は一種の言葉であり、文体は書き表された行動の軌跡である」という言葉が残されていて、とても興味深く思った。

以前より、文体にはその人の人柄だけではなく、その人の思想や生き様が滲み出ると感じていたのだが、文体が行動の軌跡であるという観点は私にはなかった。自分自身の内側の声を聞き、それをもとにした言葉を紡ぎ出すことそのものが新しい価値の創造であるという認識を持ち、それは1つの立派な行動であり、実践なのだということを思った。

ここ数日間は、ロイ・バスカーの思想に触れた専門書や論文を読み進めることに並行して、ルーマニアの社会心理学者セルジュ・モスコヴィツシの“The Age of the Crowd: A Historical Treatise on Mass Psychology (1985)”という書籍を読み進めている。こちらの書籍は400ページ近くに及ぶ大著なのだが、群衆心理学を探究する上で必読の書籍だと思う。この書籍の中では、群衆心理学の領域を切り開いたフランスの心理学者かつ社会学者グスタフ・ル・ボンの仕事が何度も引用されている。ル・ボンの指摘の中で、コロナが蔓延する現代社会の人々の姿を考察する上で重要なものはいくつもある。思うに、今回のコロナの一件は、人々を別種の群衆に変えてしまったのではないかという考えが芽生える。あるいは、群衆性をより強めた形で群衆化したという見方もできるかもしれない。

ル・ボンの指摘の中で、個人は群衆の一部になった時、個人として発揮できていた内省能力や思考能力を発揮することがうまくできなくなり、より原始的かつ感情レベルで思考や行動をするというものがある。これは、発達心理学者のカート・フィッシャーが述べる、私たちの知性の文脈(コンテキスト)依存性の話とも繋がる。

今回のコロナの一件は、地球規模で私たちを取り巻く生存状況のコンテキストを変えてしまい、それが引き金となって、別種の群衆化、あるいは群集性の強化がなされ、多くの人たちが感情や欲求レベルの次元で思考や行動をするように方向づけられているように思えてしまう。この秋に日本に一時帰国することになっているのだが、毎年定点観測的に日本の状況を見てみると、人々の群衆化が進み、人間の機械化ないしはゾンビ化が進行しているような不穏な動きを肌で感じる。

ル・ボンは、「群衆というのは、意識的人格を喪失し、彼らを支配する者や社会の提言に盲目的であり、まるで暗示を掛けられたかのように行動するような集合体である」という類の定義をしているのだ

が、今回のコロナの一件で、こうした群衆化の問題がより浮き彫りになって来ているのではないかと
思うのは私だけだろうか。フローニンゲン:2020/7/4(土)12:16

5959. 「意識」という言葉より:アートの治癒的・変容的・解放的・コミュニケーション的側面の探究

時刻は午後7時を迎えた。今再び小雨が降り始めた。今日は1日を通してすごぶる寒く、室内では
冬の時期と同じ格好をして過ごしていた。今日から1週間は同じような気温になるようであり、寒さ対
策をしようと思う。

先ほどふと、「意識」の「識」という文字に着目していた。そこには「言」と「音」という文字を見出すこと
ができる。そこからふと、私たちの意識というのは言葉と音を本質にしているのではないかと思っ
たのである。そうした考えが芽生えてみると、いろいろなことに気づく。意識と密接に関わった心身の
不調は、内的な言葉と音の不調と関係しており、意識の発達も内的な言葉と音の発達と関係して
いる。そのような仮説的な考えが芽生え、このテーマについてはここからしばらく温めておこうと思っ
た。時期が来れば、このテーマに関して新たな洞察がやって来るだろう。そうした思わぬ洞察が
やって来るためには、寝かせることと待つことが大切だ。

夕方に、改めてヨルゲン・ハーバマスの仕事を辿ってみようと思った。今月から来月にかけてはロイ・
バスカーの仕事を集中的に辿り、翌月以降からは手持ちのハーバマスの書籍を読み返すと共に、
新たな書籍を数冊ほど購入する予定である。

1つハーバマスの観点で興味深いのは、芸術と社会および社会実践を紐づけた発想を持っている
点である。ハーバマスは、そうした実践を表す言葉として、「コミュニケーション的美学
(communicative aesthetics)」というものを提唱している。これは今道友信先生が提唱した実践美学
と関連するものがあるかもしれない。そうした観点において、ハーバマスの美学思想にも探究の幅
を広げていこうと思う。

アートが持つ治癒的(therapeutic)・変容的(transformative)・解放的(emancipative)・コミュニケーショ
ンの(communicative)側面に焦点を当てた探究をしていく。このテーマは、いつか博士論文のよう
な形で考えをまとめたぐらいだ。ハーバマスの実践的な美学思想の探究に加えて、久しぶりに
デューイが芸術思想についてまとめた“Art as Experience (1934)”を再度読み返そうと思う。

今日はこれから、あと一曲ほど曲を作ろう。小雨の降る外の景色を眺めながら、内側に湧いて来た内的感覚を曲の形にする。

創作活動に伴う喜びと苦悩について、ちょうど先日友人が興味深いブログを書いていた。新たなものを生み出すことができたというある種の全能感と、納得のいくものを作ることができないという不能感の双方が創作過程に存在していることを指摘した記事だった。こうした対極的な感情を揺れ動きながら創作に励むことは、発達プロセスを歩むことに他ならないと改めて思われたのである。つまり創作活動においては、自己を肥大化させる方向性と自我の中心性を縮小させるという対極的な動きが伴っているということである。

創作活動の中に自己を発達させる変容的な作用があるというのは、このあたりに要因があるのではないかと思った次第である。上述のように、アートの持つ変容作用は注目をしている観点の1つであるため、引き続き創作活動を継続していきながら探究を進めていく。フローニンゲン:2020/7/4(土)
19:34

5960. ニューヨークを舞台にした今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今朝もまた起床した時には小雨が降っていたが、今は小雨が止んでいる。空は薄い雨雲で覆われているが、そよ風は優しい。

平穏な雰囲気の日曜日の朝の世界に広がっている。毎日が充実感と幸福感の中で過ぎていき、本当に毎週毎週が過ぎ去っていくのが早い。いや、おそらく時は過ぎ去っていくものではなく、自分の中に堆積していくものなのだと思う。人間というのは時間的重みを含んだ存在なのだ。内的成長を遂げていくというのは、時の重みを引き受けることなのかもしれない。時を引き受け、時を自分の内側に堆積させることができた時、成長という現象が起きる。そのようなことを考えさせてくれる朝だ。

今日も1日を通して創作活動と読書に従事していく。ここ最近では再び読書にも時間を充て始め、一時期意図的に活字の世界から離れていたことが自分の中に渴きないしは飢えの状態を生み出していた。読書に関するファスティングをしばらく行っていたような感覚が自分の内側にあり、ファスティングを終えた今、ここからまた読書に打ち込もうとする自分がある。ファスティングを行った分、読書

に対する渇きと飢えは激しく、書物を通じて取り入れたものは自分の内側に深く浸透していくことだろう。

ファスティング後の回復食と同様に、情報次元のファスティングを行った後には、どのような書物を読むかが大切である。それについては心配はない。今読み進めている書物はいずれも傑出しており、それらはことごとく自分を形成し、自分を深めてくれる養分になるだろう。ロイ・バスカー、ヨルゲン・ハーバマス、アーネスト・ベッカー、エーリッヒ・フロム、テオドール・アドルノなどの思想家の書籍をここからしばらく読んでいく。

それでは今朝方の夢を振り返り、その後、本日の創作活動に入りたい。夢の中で私は、小中高時代から付き合いのある親友(SI)と一緒にテレビゲームをしようとしていた。私たちは旅館かどこかに宿泊しているようであり、広い座敷部屋に置かれたテレビを前にして座っていた。今からやろうとしているのは推理もののゲームであり、有名な日本のアニメが元になっているものだった。

その部屋には複数のテレビが置かれていて、他のテレビでも同じゲームが行われていた。他の人たちの迷惑にならないようにと、私は親友に、テレビにイヤホン挿して音が漏れないようにしてゲームをしよう提案した。彼はすぐに快諾をしてくれたので、私がイヤホンをテレビの端子に差し込むと、私のイヤホンからは音が聞こえて来ているのだが、友人のイヤホンからは音が聞こえてこないようだった。何度やってもうまく音が聞こえてこないようだったし、そもそもイヤホンの配線が短いため、テレビ画面に近づいてゲームをする必要などもあったので、いつそのことイヤホンを差さずにゲームをしようということになった。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はニューヨークのある施設の中にいた。厳密には、その施設のトイレの中にいた。そこで何をしていたかという、中国人の若くて小柄な女性と一緒に、人身売買の犯人をおびき寄せて警察に捕まえさせるということを行っていた。その中国人の女性は、人身売買の斡旋業者を装い、犯人と電話でコンタクトを取った。実際には、犯人から電話がかかって来て、その電話にうまく対応するのが彼女の役割だった。

犯人から電話がかかって来た時、私の携帯でも犯人とやり取りができるようになっており、私は思わず声を出してしまって、犯人と会話をしようとしてしまった。彼女との事前の約束では、犯人とのやり

取りは全て彼女に任せることになっていたことを一瞬忘れてしまっているようだった。ある意味条件反射的に声を出してしまったのだが、犯人は女性が電話に出ることを事前に知っていたようであり、私が声を発しても、それを雑音だと認識したのか、何も疑われずに済んだ。そこからは、中国人の彼女がうまく犯人を誘導していった。

犯人はまんまと彼女の誘導に乗り、そこからすぐに警察に捕まった。犯人が警察に捕まったことを知った私たちは大いに喜び、彼女と握手をして私はその場を後にした。施設の外に出ると、そこは雑踏のニューヨークであった。通りにはゴミが散乱しており、通りには少し異様な匂いが漂っていた。

通りを歩き始めたところで、突然私の身体は近くの建物内のトイレに瞬間移動していた。トイレの個室に入ろうとすると、目を付けていた個室に小柄なアメリカ人男性が入ってしまったので、その個室の横に入った。すると、ここはアメリカなのに個室のスペースがやたらと狭くて驚いた。一応便器も床も綺麗だったのだが、その狭さに違和感があったので、結局何もせずに個室を出ようと思った。そこで夢の場面が変わった。

今朝はその他にも夢を見ていた。ここ最近知り合った知人が東京の港区に住んでいることを偶然知り、今度日本に一時帰国して東京に滞在することがあれば、その方の住んでいる近くに滞在してもいいかもしれないと思った。そうすれば、お互いにすぐに会えると思ったのである。私はその方に何か贈り物をしていたようであり、それに対するお礼のメッセージが携帯に届いていた。フローニンゲン:2020/7/5(日)06:15